

協働でつくる 新たな地域

第22回（最終回） 東近江市永源寺診療所 —専門性を基盤にした連携から地域における協働への展開

東海大学 健康学部 助教 竹内 友章

地域住民や、福祉に限らないさまざまな分野の関係者が協働し、地域生活課題に対応している取り組みから、地域共生社会の実現につながる地域づくりの視点を学びます。



さまざまな関わりが支える生活



地域の会議には警察官も参加

専門職連携から協働に向けた 研究会の立ち上げ

永源寺地域がある東近江医療圏は、東近江市、近江八幡市、日野町、竜王町の2市2町から構成される人口約23万人の地域である。この医療圏域には、11の病院と100以上の診療所、

概要

滋賀県東近江市永源寺地域は、滋賀県南東部に位置し、三重県と境を接する山間農村地域である。地域の人口は5,161人、高齢化率は37%を超えており、集落によっては高齢化率が50~80%の地域もある（2020〈令和2〉年4月時点）。

全国の過疎地域と同じく、この地域の社会資源は限られている。デイサービスやショートステイを提供する高齢者福祉施設はあるものの、入院できる施設、訪問看護ステーション、リハビリ施設等がない。そこで、「永源寺診療所」が中心となって、専門職だけでなく地域のさまざまな人たちと協働する「地域まるごとケア」と呼ばれる実践を行っている。

永源寺地域では約50%の方が在宅で亡くなっている。58.8%の方が最期を自宅で迎えたいと回答し、その理由として、「自分らしくいられる」「住み慣れているから」などがあげられている。一方で、病院や施設で亡くなる人の全国での割合は80%程度である。

住み慣れた地域で暮らし続けることを支える永源寺地域での取り組みは、地域住民と専門職が「地域課題」と「ともに暮らすこと」に視点をおいた地域包括ケアの実践と言える。

- ・所在地 滋賀県東近江市山上町1352
- ・電話番号 0748-27-1160
- ・ホームページ <https://eigenji-clinic.jp/>
- ・主な事業 診療所の運営、プライマリーケア研修など

《注》

- ※1 過去15年間での永源寺診療所の在宅看取りは年間25~36人。永源寺地域全体では年間約60人が亡くなっている。
- ※2 日本財団「人生の最期の迎え方に関する全国調査」（2020年）
- ※3 厚生労働省「人口動態統計年報 主要統計表 死亡 第5表」（2019年）

介護福祉施設などが点在している。しかし、退院後のリハビリ施設や訪問診療の医師を見つけれず、寝たきりの状態であっても、外来への通院が必要となるなど、医療・介護・福祉の連携は課題となっていた。そのような状況を改善しようと、2007（平成19）年、当時の東近

江保健所所長の角野文彦氏と、地域の医師会会長の小串輝男氏の呼びかけによって、圏域内の病院の地域連携室、医師会、看護師、リハビリ担当者が集まり、「近江医療連携ネットワーク」（以下、ネットワーク）が立ちあげられた。当時、脳卒中をはじめとする

急性期の治療の後、回復期の病院への移動をスムーズに行えるようにするために、医療関係者の連携は地域での課題となっていた。そこでネットワークでは、診療計画を作成し、治療を受けられるすべての医療機関で情報共有のためのカルテづくりに取り組んだ。ネットワークで会議を重ねるなかで、病院の治療だけではなく、退院後の生活を話し合う機会も重要ではないかと、回復期・維持期の病院やリハビリ関係者から、介護・福祉施設などとの連携の必要性の声があがるようになった。そこで他職種・他業種が参画できるように声かけを始めた。

ネットワーキングも「患者よし、機関よし、地域よし」をテーマに掲げ「三方よし研究会」（以下、研究会）と名称を変更し、より

多くの人が関わりをもち始めた。多くの人が関わりをもち始めた。多くの人が関わりをもち始めた。

感染拡大後にはオンライン化など開催方法に変更があったが、2022（令和4）年1月の時点で延べ165回開催している。

研究会が始まった当初は、業務でつながりのある専門機関に声をかけ、参加を募った。月1回開催された会では、話題提供者と、実践や活動の報告や課題の共有をし、さらにグループごとの意見交換を行ってきた。さまざまなテーマが話されるなかで、医療・介護・福祉の関係者だけでなく、消防、警察など多くの人が地域の生活に関わっている姿が見えてくるようになった。そこで、話題に登場する人に声をかけ、次の研究会に誘ったり、活動を報告してもら

うなど、100人以上が参加する学習の場となっている。新型コロナウイルス感染症の

例えば、「地域の医療の現状を知ってもらおうことが大切だ」という声に賛同した専門職や市民は、「市民が考える医療フォーラム」を開催し、病院の医師不足や在宅医療のことを多くの人が



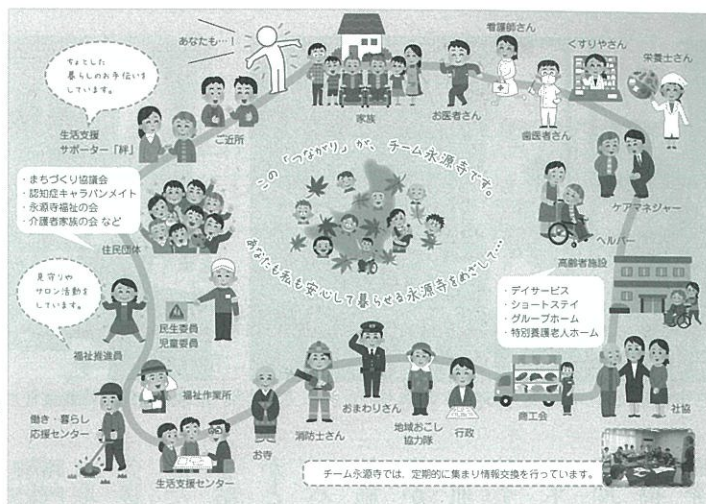
竹内 友章
(たけうち・ともあき)
東海大学健康学部健康マネジメント
学科助教。専門は、地域福祉、社会
起業。福祉施設、地域、企業などを
フィールドにアクションリサーチなど
オルタナティブな実践と研究を行
う。主な著書に『社会起業を学ぶ
社会を改革するしごと』(関西学院
大学出版会、2018年、共著)など。

暮らしは、変化の連続であ
り、生活課題はそのなかに見え
隠れするものである。支援の対
象、法律や制度で課題を切り分
けることは、当事者の生活の連
続性を断つことにつながる。永
源寺地域での「地域まるごとケ
ア」は、支援者同士が顔の見え
る関係をつくりながら、当事者

地域にさまざまな活動がある
ことだけでなく、それぞれの活
動をする人の具体的な名前や顔
が常に思い浮かぶ状態をつくる
ことが、「チーム永源寺」の役
割と言えるだろう。地域住民そ
れぞれが、多様で複合的な生活
課題を抱えながら暮らしている
一方で、地域で何かしらの活動
をしている人たち、志のある人
たちも同時に存在するのだ。

暮らしへの想像力を育てる

それぞれの現場がおかれている現状
を知ること、「自分たちには
何ができるのか?」「地域のた
めに何が必要か?」という発想
が生まれるようになった。
例えば、子育て中の家族から



チーム永源寺

ちと考える機会となった。
「できないこと」を共有し
「できること」から地域をつなぐ

研究会で大切にしてく
たのは、ネットワークを
広げながら出会いと対話
を繰り返すだけではな
く、お互いの立場や依拠
する価値観の違いを理解
することだ。課題解決を
考えようとすると、社会
資源の少ない地域では
「できないこと」が多く
なってしまうが、研究会
での学びを通して、それ

は「自分たちで小児科をつくる
ことはできないけど、子育ての
勉強会を開催しよう」という声
が上がり、「はちどりの会」と
いうサークルが生まれた。総合
病院の小児科医との協働で、夜
間や休日に子どもの体調が悪く
なった際の対応方法をまと
めたリーフレットを作成した。
課題とともに暮らし地域を
支える「チーム永源寺」

保健所圏域レベルのような広
域的なネットワークで、専門職
との協働を強化しながら、小さ
なエリアで地域包括ケアを実践
しているのが「チーム永源寺」
だ。医師、看護師、薬剤師、ケ
アマネジャー、社会福祉協議会
や行政の専門職だけでなく、商
工会、地域おこし協力隊、警察、
宗教者(お寺)、地域ボランティア

の地域生活への想像力を育てて

いく実践であると言える。

視点・論点

地域での協働が、法律や制度
の課題を乗り越えていくために
求められるのであるならば、個
人的なつながりこそ重要である
と、永源寺診療所の実践から読
み解ける。その基礎となる顔の
見える関係づくりの視点と論点
を提示していきたい。

ひとつめの視点は、専門性の
違いによる、地域のキーパーソ
ンやプレイヤーなど「登場人物
のズレ」を認識することである。
地域には多様な専門家がいますが、
暮らしの場面では、住民の誰も
が専門家になり得る。連携先か
ら漏れている人や団体、すなわ
ち「顔の見えていない関係」へ
の想像力が重要になる。
ふたつめは、協働する人たち
同士の「情報と意味のズレ」へ
の注目である。さまざまな専門
性をもつ人たちの参加は支援の

多様化につながるが、関わる人
によっては同じ情報でも意味に
ズレが生じる可能性や、何を重
要な情報として採用するかに違
いが生まれる。それは、関わる
人同士の対立にもつながり得る。
そのため3つめの視点として、
「関わり方のズレ」を尊重するこ
とである。専門職は、仕事の考
え方、業務外の時間の使い方、
また住民は、居住歴や職場環境、
キャリアなど、さまざまな点で
関わり方の前提が異なる。活動
の背景や思いを知ることを基本
としながら、その違いに気づく
ことが大切な視点となる。
一方で、視点を整理すること
で、個人的な関係の背景にある
さまざまな法律や制度の課題も
見えてくる。地域での協働に関
する課題が「地域だけの課題」
にすり替わることがないように
配慮しなくてははいけない。